

乳幼児期における音楽的行動の縦断的観察

楽器を横断する“楽器性”の探索

山崎寛恵¹・丸山慎²・森内秀夫¹

(¹ヤマハ音楽振興会・²駒沢女子大学人文学部)

問題

音には「楽音」と「生活音」の2種があるといわれている。生活音とは、音源からの直接音と、壁や地面など周囲の様々なサーフェイスでの反響音からなり、場所や出来事、モノを特定する日常の聴こえである。楽音ももちろんそうした音源と反響音からなるものであるが、生活音との違いの一つは、それが「表現としての音」だということである。

ところで、乳児期には、表現としての表情や音声表出に発達的变化があることが認められている(山田, 1987)。また、別の表現活動である描画について、自身の行為が残す痕跡に気がつくことが最初期の表現発達だとする報告がある(西崎, 2007)。これらの先行研究をふまえると、ヒトは自らの行為によって生成される様々な音が表現となりうることや、その音の群を構造化することに気づくプロセスがあると考えられる。つまり、乳児期の音楽の関わり方には、他者による音(演奏や歌)に身体を同調させる活動にくわえ、モノとの接触や物理的な操作を主とする自らの行為が生成した音に選択的に注意を向けるといった活動が、同時進行しているはずである。

しかしながら、偶発的ないし単に物理的に発生させる音から、表現としての音の生成へと移行していく活動が何を契機にして現れるのか、すなわち自ら音を生み出し、かつそれに選択的に注意を向けるといった発達最初期の活動が後の音楽的な行動の発達にどのように結び付いているのか、その過程の詳細は明らかになっていない。そこで、本研究では日常的な遊び場面で、楽器もしくは音の出る玩具を養育者と乳児に提示し、それらのアイテムをどのように操作するのかを観察することで、上述のような表現としての音への気づきが生じるプロセスを記述することを目的とした。

方法

家庭用デジタルビデオカメラを使用し、養育者と乳児の自宅での遊び場면을撮影した。遊び場面では、卵型マラカス(キッズパーカッション:エッグマラカス)2個、グロッケン(アウリスグロッケン:ダイアトニック8音)、バチ1対(木製とゴムの2種で1歳頃から木製に変更)、ビニール製動物人形(腹部を押すと音が鳴る)の玩具を使用した。遊び方や順序は特に指定しなかった。分析は生後6~18ヶ月齢の期間(3ヶ月毎)、撮影開始から10分のウォーミングアップを経た後の10分間とし、養育者と乳児がそれぞれどのアイテムを操作するか、そして各アイテムにたいする接触によって音が発生するか否かを調べた。

結果と考察

生後6ヶ月齢では、養育者が乳児の手をとって(ガイドして)一緒にアイテムを操作していたが、18ヶ月齢では乳児が自分でアイテムを操作し音をならすようになっていた。

生後9ヶ月齢になると、乳児は手に届く範囲のアイテムを自ら操作できた。ただし、その操作には、音を生成するという特徴はあまりみられなかった。養育者の場合は、アイテムとの接触にほぼ音が生成されていたが、乳児の操作には音の生成がわずかで、ただアイテムに触れ続けることが圧倒的に多かった。しかし、18ヶ月齢になると音を伴う接触が増加した。

また、ビニール製動物人形を押したり、マラカス単体を振ったりすることで音を生成する場合と、マラカス同士、グロッケンとバチ、ビニール製動物人形とグロッケンなど、アイテム同士を衝突させることで音を生成する場合があった。本観察対象の乳児の場合、生後9~14ヶ月にかけては、組み合わせに用いるアイテムは様々であったが、18ヶ月齢になるとグロッケンとバチの組み合わせが顕著になった。

これらの結果から、アイテムに対する接触の性質や利用するアイテムの組み合わせが限定されていくことがわかった。そして、音を生成する行為には、複数のアイテムへの接触を通じた探索から、特定のアイテム(同士)による音生成の探索に移行する、という初期発達のプロセスがあることが示唆された。このような探索の変化に、他者や周囲の環境がどのように関わっているのか、今後明らかにする必要がある。